

【入選】

サンデイエゴの鯨

クジラが潮を吹く。噴水のように勢いよく噴き上がる海水は、大自然そのものを感じさせた。クジラは数時間に一度、呼吸をするために水面に上がってくる。クジラの潮吹きは、彼らと言う哺乳類が呼吸をしている——まさしく、生きている証そのものと言える。

『見えたな』

小舟を運転する漁師が鋭く言った。ホエールウォッチングは、海面に上がる潮を探すところから始まる。漁師はエンジンに手を掛け、舟を加速させる。塩辛い水飛沫を俺は顔で受け止めた。

浅黒い漁師は、皺だらけだが精悍な顔を、さきほど潮が上がった方へと向けていた。夏だろうと冬だろうと、ボロボロの麦わら帽子を首にかけ、薄汚れて袖が破れたシャツを身に纏っていた。かなりの高齢のはずだが、いつでもパワーが漲っていて、まさに何十年も海を生き抜いてきた男の姿だ。

数百メートル進んで、舟を止める。

問近に、クジラの巨体が見えていた。

サンデイエゴで主に見られるクジラは、コククジラと呼ばれる種類で、体長は二一—二三メー

ル。中型のバスくらいだ。クジラの中では比較的小型な種類だが、それでも大きい。

足元の海を覗くと、体表をフジツボや貝で覆われたクジラの身体が目映える。生物と言うよりも、大きな岩や小山が海に漂っているようだった。

「春樹——」

クジラに、俺は日本語で呼びかける。「久しぶり、元気にしてたか？俺は、まあいつも通りだけど。おまえは、何か困ったこととか無いか？」

もちろん、クジラは何も答えない。ただ、海面を悠然と泳いでいるだけだ。

漁師はいつの間にか火をつけた葉巻をふかしている。初めのうちはクジラに語り掛ける俺を物珍しそうに見ていたが、ここ数年は全く興味を失っている様子だ。

「そうそう、夏香ちゃんがもうすぐ大学受験なんだけど」夏香というのは、春樹の年の離れた妹だ。

「あの子、受験間近だったのに、落ち着いてるよ。ほんと、しっかりしてるよな」

俺はこうして年に一度、春樹に彼の家族の話を

しにきている。

不意に、クジラがヒレを動かし泳ぎ始める。その際起きた波が俺たちの乗る小舟を揺らした。

『潜るようだ。離れるぞ』

漁師が言う。

クジラは高く掲げた尾ヒレを、海面に打ち付け潜っていく。たつぷりと呼吸をして、再び海の中を泳ぎ始めるのだ。

「春樹、また来るからな——」

波の音に負けないように、俺は声を張り上げた。

四年前、このサンデイエゴの海で、春樹は波に吞まれ帰ってこなかった。何日も掛けて搜索したが、遺体さえも見つからずじまいだ。

しかし、春樹は死んだのではない。彼はクジラになったのだ。

※

港に戻り、舟を降りる。俺は漁師に丁寧に敬礼を言った。以前は拙かった英語も、最近は流暢に

経済学部 現代ビジネス学科2年 濱口 将吾

喋れるようになってきた。

『来年も来るのか?』謝礼として渡した金を数えながら、漁師が訊ねてくる。

『そのつもりだよ、あなたが迷惑じゃなければ』
ふん——と漁師は鼻で笑う。『謝礼が貰えるなら構わん。ただ、俺もそう長くはねえだろうよ』

漁師はそう言うが、彼はエネルギーに満ちているようで、俺なんかよりよほど若々しく見えた。そう簡単に死ぬところが想像できない。

漁師と握手をして別れる。相変わらず、岩のように堅い手だ。

「クジラを見に行かないか?」

四年前、俺は春樹にそう提案した。大学の卒業旅行では、海外に行きたいと前から二人で話していたのだ。偶然、テレビでホエールウォッチングの特集を見て興味を持っていた。

「男二人でクジラかよー」春樹は苦笑する。大学四年間で一度も恋人が出来なかった俺は元より、就活中に破局して以来、春樹にも彼女はいなかった。「……悪くねえ。行こうぜ」

行先を選んだのは、アメリカはカリフォルニア州の都市、サンディエゴだった。サンディエゴは、ホエールウォッチング発祥の地と言われる。かなりの高確率でクジラを見ることが出来るクルージングは、海外からの観光客だけでなくアメリカ人にも人気らしい。

「サンディエゴって何があるんだ?」春樹が首を

傾げる。「あ、『老人と海』の舞台だったっけ?」

「違うでしょ、たしか。そのサンディエゴは主人公の名前だろ」

春樹は海外に行った経験はなく、俺も小さい頃家族とハワイに行ったことが一度あるだけだった。時間のあるうちに一度でもちゃんとした海外旅行をしてみたかった。

就活を終えて卒業を控えるだけとなった俺と春樹は、とにかくバイトに出まくり旅行の資金を稼いだ。

そして卒業後の春休み、ついに格安航空券を取って、俺たちはサンディエゴの地に降り立った。一日目でサンディエゴの街を観光し、二日目に海でクジラを見る予定だった。

初めての海外旅行に俺たちは舞い上がっていた。俺はスマホの容量が足りなくなるほど写真を撮ったし、春樹はアメリカにもある!と日本に馴染みのある大手飲食チェーンの店を見つけ、妙なことでしゃいでいた。

しかし、クジラを見る予定だった二日目、天候が急に悪化し海は荒れ、舟を出すことが出来なくなってしまう。残念だったが仕方がない。

この天候だと、ホエールウォッチングの代わりにまた街中を観光するという事も出来ない。俺たちは諦めてホテルの部屋でまったり過ごすことにしていた。幸いにも、サンディエゴには一週間弱滞在する計画だったので、今日が何も出来なくとも問題はなかった。

「ルームサービスの頼んでみる? あー、で

もこっちだとチップとか払うのかな?」退屈そうに、春樹が言った。「チップ渡さないと怒られたりするのか?」

「どうだろうな。そういうの難しいわ、日本人には」

その後、最近観た映画がどうかとか、春からの新生活がどうかとか、元カノがどうかとか他愛もない話をしてきたが、やがてお互いに退屈が耐えられなくなってきた。

「なあ」

春樹がにやりと笑った。——その時の何か悪戯を思いついたような不敵な笑みは、四年も経った現在でも、不思議とよく覚えていた。

「海、行つてないか?」

当然、俺は反対した。こんな悪天候の中、海に近づくのは自殺行為だ。日本と、サンディエゴでは雨の降り方が全然違う。サンディエゴの雨は、どこか暴力的だ。

俺は、しばらく反対していたが、結局根負けして、海を見に行くことになった。なんだかんだ言ってる俺も、せっかく海外に来たのにホテルに籠っていることには辟易していたのだ。

外に出て、持ってきた折りたたみ傘が意味をなさず二人して全身ずぶ濡れになったときも、俺たちはまだしゃいでいた。二二歳にもなって、子どものように。

春樹が海に落ちたのはそれから一時間も経たない頃である。

※

天候が回復するのを待って、警察や、地元漁師たちの協力の元、荒れる海に落ちた春樹の捜索が開始した。

俺はその間、茫然とホテルに籠っていることしか出来なかった。やがて、予約してあった帰りの飛行機で日本に帰る。春樹が座るはずだった隣の座席は、物悲しく空席だった。

帰国してしばらくしてから、春樹の捜索が打ち切られたことを知らされた。

日本について、真っ先に春樹の実家へと向かった。そして彼の家族に謝罪する。海に近づくことを、俺は絶対に賛成するべきではなかったのだ。

春樹が中学生の頃、彼の両親は離婚をし、それ以来彼の母親が女手一つで兄妹を育てて来た。大学に行かせてもらえた母親への感謝を、春樹はことあるごとに口にしていた。

母親は、涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら、俺を一切責めることなく慰めてくれた。あなたが悪いわけじゃない——と。聞いていた通り、本当に優しい人だったが、その優しさが、俺にはあまりに辛かった。

その隣で、妹の夏香は、白い顔でじっと座っていた。顔からはなんの感情も感じられず、今にも崩れてしまいそうな、危うい状態に思えた。彼女から、兄を奪ってしまったという事実が、俺の肩に重くのしかかる。

遠い異国の地から家族が永遠に帰ってこないという不幸の重さが、俺には計り知れない。

春樹と出会ったのは、高校三年生の時に通い始めた塾だった。彼は明るくいつも大人数の会話の中心にいて、俺とは正反対のタイプだった。

何のきっかけで他校の人気者である彼と話すようになったのかは忘れたが（恐らく春樹の方が話しかけて来たのだろう。多分、意外にも映画が好きという共通点によって意気投合した。B級ホラーやパニックムービーを好むという、俺たちの映画の趣味はあまり他の人とは合わなかったのだ。

俺は第一志望として、春樹は第二志望として、同じ大学の同じ学部合格し、彼との付き合いが四年間も続くことになることは、予想だにしていなかった。

春樹にとっては大勢いる友達のうちの一人だっただろうが、俺は春樹の他に友達と呼べる者はほとんどいなかった。時々、俺には無いものをたくさん持っている彼が眩しく見えることもあったが、それでも俺たちは——あまりに臭い言い回しをする——掛け替えの無い親友だったと、俺は信じている。

そんな、ただ一人の親友が死んだ。ただ一人の親友が死んでも、社会とやらは、俺のことを待つてはくれないのだ。そのことが、地方の中小企業に入社してみても、嫌と言うほど身に染み込んだ。

俺が配属されたのは営業課だった。営業職は時として人間扱いどころか、生物としても扱ってもらえない。

上司は、よく俺たちは家族だ、とか絆とかチームといった言葉を口にした。アットホームな職場——とはよく言ったものだが、上司が本当に考えているのは、自分の保身と週末のゴルフの事だけだった。

俺は、会社の雰囲気になんとも馴染めなかった。働き詰めで、もはや休日の過ごし方を思い出せなくなった頃、ふとサンディエゴに行こうと思いついた。

春樹が死んだ場所——サンディエゴ。日本で、春樹が行った場所を巡り、思い出を追憶するようなことを俺は一切していなかった。そんな暇が無かったというのが一番だが、恋人を失ったのであるまいし、そこまで感傷的にもなりたくなかったのだ。

しかし、サンディエゴだけは、別だった。サンディエゴだけは、俺の中で『春樹との思い出』になっっていた。あの場所で、俺と春樹の時間は止まっている、あそこに行くことは春樹を悼むことにはならない。

上手く言葉に出来ないがそう感じた。激務に追われて、そう感じてしまったのかもしれない。早速、俺は一人分の航空券を手配した。少ないが、入社以来ほとんど手を付けていない貯金を切り崩した。

有給などという立派なものはないうちの会社には無

かったから、親戚が亡くなったことにして、強引に会社を休んだ。後からどうなるかなんて、知ったことじゃない。

およそ一年半ぶりに降り立ったサンディエゴの地は、暑さのため人々がえらく薄着でいること以外、何の変わりも無かった。

観光を満喫するような金はないから、適当に街をぶらぶらした後、俺の脚は自然と海へと向かっていった。春樹が死んだあの海だ。

港と言って良いのか分からないほど、小さな漁港に立ち、俺は海を眺めていた。ザー、ザーと心地よい波の音が聞こえている。

その日の海は風いでした。一年半前のあの日、あれほどに荒れ狂っていた海と、今日の前で穏やかに波を立てている海は、本当に同じ海なのか疑わしいくらいだった。

ふと、こんな海で春樹が死んだことが信じられなくなった。

今でも、普通に海で生きているのではないか。例えば、無人島に流れ着いて、一人で常夏の島を満喫したり、クジラと泳いでいたり――。

――探しに行こう。

ふと、足元を見ると薄汚れた小舟が置いてあった。これに乗って、海に――

『何をしている?』

小舟に乗り込もうとした俺に、射竦めるような声が投げかけられる。『俺の舟に何をしている』

ハッ――と振り返ると、長くて簡素な釣り竿を手にした、浅黒い肌をした老人が、俺を鋭く睨み

つけていた。

『ごめんなさい!』俺はたどたどしい英語で謝罪する。咄嗟に言い訳を考えていたが、何も思いつかない。『ク、クジラを――』

『何だと?』

『クジラを見ようと、思って……』苦し紛れに、そんなことを言ってしまう。

老人の目つきがますます鋭くなる。俺は思わず顔を伏せた。

『お前……あの時の日本人か?』

『え……?』

老人は、一年半前、春樹の捜索に協力していた地元の漁師だった。俺の方は、正直見覚えが無かったが、彼は俺のことを覚えていたそうだった。

『あの時もかなり憔悴していたが』漁師は、俺の顔をじろじろ眺めて言う。『今も今で、生気が無いな。死にかけみたいだ』

『縁起でもない』思わず日本語でそう呟くと、漁師は怪訝そうに首を傾げた。確かに、日本では日々休みも無く仕事に追われているが、死にかけなどと言われるのは心外だ。

『クジラならいいぞ』

『いない?』

『この季節、クジラは北極海で子育ての真っ最中だ。この海にはいない』

確かに、コククジラは、二月から三月にかけて、子育てのために移動すると言うのは、旅行の計画を立てた際に調べて知っていた。一般にサンディエゴでホエールウォッチングを行うの

は、このコククジラが移動する時期だ。

ただ、それでも良かった。別に俺はクジラが見たいという訳ではない。

『舟を出して頂けませんか? 海を見たいんです』

漁師は、俺の頼みを一蹴した。もしかすると、俺が親友の後を追って海に身を投げるように見えたのかもしれない。あいにくそこまで追い詰められてはいないつもりだった。

結局、俺はしつこく食い下がり、謝礼を渡すことによって、どうにか舟を出すことの了承を受けた。

エンジンを搭載した小舟が、猛スピードで沖まで出る。波は穏やかなのに、舟はかなり揺れて、俺は吐き気を催した。沖で漂いながら、漁師は釣り竿を下ろす。この辺りでは何が釣れるのだろうか。『えっ?』海をぼんやり眺めていた俺は、目を疑った。『あれ、クジラじゃないですか?』

最初は何言ってもやがる、と鼻で嗤っていた漁師だったが、吹き上がる潮を目にしてからは、目の色が変わった。紛れもなく、クジラの呼吸だ。

『馬鹿な』近づくと、老人は呟き、エンジンを操作する。

手が届きそうな距離に、クジラが見えた。岩山のように大きく、全身がやや白っぽい。その姿が海中に見えた。

不意に、クジラが水面に身体を乗り出した。海の中から勢いよく飛び上がり、ヒレを翼のように広げて、背面からその巨体を水面に打ち付けた。

躍り上がるような雄大な動作だ。大波が起き、危うく小舟は転覆するところだった。

ブリーチングと呼ばれる、クジラの大ジャンプである。体に付いた寄生虫を落とすため、求愛行動などいくつかの説があるが、何故クジラがこのような行動をとるのかは判明していないようだ。

しかし――

跳ね上がったクジラと俺は目を合わせた。やや垂れた腫れぼったい眼。どこか包み込むような優しさを持った眼だった。

どういふ訳か、俺の中で、春樹の垂れ目と重なって見えた。

「春樹なのか!?」俺は、海に潜ったクジラに叫ぶ。漁師がぎょっとしていた。「お前、春樹だろ? 死んでなかったんだろ? こんな所にいたのかよ!」

クジラはそれから、二時間近くも小舟から離れなかった。漁師もこんなことは初めてだ、と驚いていた。普通なら移動しているはずの季節に、この海に現われ、ここまで俺がいる舟から離れようしない。

俺はこのコククジラこそが春樹なのだと確信していた。

また来年、会おうぜ――と語り掛けると、クジラは満足気な表情を浮かべ(て)いるように俺は見えた、海の深くへと潜っていった。

それから毎年、俺は『春樹』に会いに行くことになった。

※

『来年からは、来られなくなってしまった』

初めてサンディエゴに訪れてから十年近く経った、ある年、俺は漁師にそう告げた。

『そうか』漁師はただ、そうとだけ言った。

『寂しくないのかい?』俺は思わず、そう呟く。もう、彼とも長い付き合いだ。既に浅からぬ仲になつていと思つていたのだが、それは俺だけだったようだ。

『面倒ごとが減つて、喜ばしいさ』ふん――と彼は鼻を鳴らす。『そうか、じゃあ、お前と会うのもこれが最後か』

『実は、結婚することになって』俺は説明する。彼は眉一つ動かさなかった。『だから、落ち着いたらまた来たいと思つてゐるんだけど、しばらく――二、三年は難しいかもしれない』

『その頃には、俺は死んでるだろうな』当たり前のように彼が言う。『じゃあ、これを渡しておく』そう言つて、彼は、一つの茶封筒を俺に投げて来た。

『これは……?』封筒には数十枚のドル紙幣が入つていた。

『結婚するんだらう? お祝いだよ』

『これつて、もしかして、今まで渡してきた』俺がこの十年弱謝礼として彼に渡してきたお金と同じくらいの金額が、ほぼそのまま入つていた。

『使い道が無かつただけだ。勘違いするんじゃないえ』そっぽを向いて、漁師が答える。『あんな死

にかけみたいな顔の奴から金なんかとれるか』

『ありがとう。いや、このお祝いのことだけじゃなくて、今まで、本当に――』

『もしも俺の言葉を遮つて言う。』もし、この先、お前が落ち着いて、サンディエゴに来られることがあれば……お前とお前の家族に良い釣り場を教えてやる』

漁師が、俺の方を向いて、少し微笑んでいた。彼のこんなにも穏やかな表情は初めて見た。

その日、海に出たが、クジラ――春樹に会うことは出来なかった。こんなことはこれまでで初めてだった。今まで、海に出れば必ず彼に会えていた。

春樹に会う事も無く、帰ることになった。しかし、俺の寂しさが通じたのか、飛行機の運航がすべて停止となった。

――悪天候のためだ。スクールが接近していた。仕方がなく、漁師の家に泊めてもらう。彼は独身で、港近くの質素な家に一人で暮らしていた。いつになく気前が良かった彼は、とっておきだと言ふ古い洋酒を振舞ってくれた。

会社に出社できなくなったことを連絡すると、たつぷり嫌みを言われたが、面倒くさくなって適当に切り上げた。こつちでは現在夕方だが、時差があつて日本ではちょうど出社時間くらいだ。もつとも、ほとんどの社員はその時間より早く会社に来て、定時を過ぎても働いているのだが。

同時に、婚約者にも連絡する。彼女はひどく心

配していた。俺の親友が、いまと同じくらいの悪天候の中、海に落ちたことを知っているからだ。

大丈夫だ、と彼女に伝える。もう、海に近づいたりはいしない。同じ過ちを犯すほど、俺は馬鹿じゃない。思えば、あの日の俺たちは、初めての海外旅行に浮かれていたとは言え、本当に愚かだった。

その日、漁師の布団を借りて、眠る。彼自身は柱にハンモックを括り付けて寝ていた。何度も布団を譲ろうとしたのだが、聞かなかった。彼が強情なのは、いつものことだ。

漁師の布団の中で、俺は夢を見た。あの日の夢だ。春樹が海に落ちた、あの時の。

海に落ちて、身体がそのまま、沈んでいく。

いくら藻掻いても、何も掴めない。水面はどんどん遠くなるだけだった。口や鼻から空気はとめどなく逃げて行つた。水を吸った服は重くなる。海流に翻弄される自分の身体は、洗濯機に入ってしまった虫のようなものだ。

——これは、春樹の視点？ 海に落ちた春樹の

……

やがて、視界の端から、何か大きなものが近づいてきた。

どうやら生物らしい、と気が付いたときには、その『怪物』が口を開いていた。何が起こったのか分からないまま、目の前が真っ暗になる。

「うああああああつ」

布団から飛び起きる。全身汗でびっしょりだった。全身が空気を求めているかのように、何度も

何度も荒い呼吸をした。「夢……か？」

胸に手を当てると、心臓が破裂しそうに早鐘を打っていた。窓の外を見ると、雨は弱まる様子がまるでなかった。大粒の雨が、窓を叩いていた。これは、しばらく帰れないかもしれない。

水を貰おうと、部屋を出た時、ふとどこからか俺の名を呼ぶ声が聞こえた。

漁師の声ではない。もっと、若かった。そして、声は遠くの方から聞こえていた。

「春樹？」

何故か、俺はそう思った。春樹だ、春樹に違いない。

俺は、家を飛び出して、海に向かって走り出す。大雨に打たれながら、体が濡れるのも厭わずに。最近歳を取ったと感じていたが、まだこれほど走れるとは。

海は、荒れ狂っていた。あの時のように——いやひょっとしたらそれ以上に。

春樹——！ 俺は叫んだ。しかし、叫び声は雨音と風の音に掻き消されてしまう。何度も何度も、俺は彼の名前を呼んだ。

何をしているんだろう、俺は。顔を濡らすのが、雨水か海水か涙なのか、情けないことにそれすら分からない。

不意に、高波が眼前に迫る。

ああ、そうか。

死ぬのか、俺も。この海で、俺も——

この地で死んだ彼のことを考える。俺も本気で、春樹がクジラに乗り移ったなんて考えていた訳で

は無い。しかし、俺には抛り所が必要だったのだ。

日本に戻ったところで、あの会社に戻るだけだ。

ああ、いつそ死ぬか。その方が楽だ。それなら、春樹と同じところで。

もしかしたら、俺もクジラになるかも——くだらないことを考えて、自虐的に俺は笑う。

いや——

駄目だろう、絶対に。

頭に婚約者のことが思い浮かぶ。

彼女に、家族が死ぬ苦しさを再び味わわせるわけには行かない。決して。

誓ったのだ。彼女を守ることを。

手足を必死でばたつかせる。海水を掻き分けているつもりだったが、水を吸った服がどんどん重くなっていつて、身体は沈んでいく一方だ。

ああ、クソ——

死んでたまるか。

突然、何かが俺の全身を包み込んだ——気がした。

何に包まれたのか、分からないうちに、俺の意識は遠のいていく

※

「ぶはあつ！」

思い切り、海水を口から吐き出す。そしてぜーぜーと荒く呼吸をした。

なんだか、クジラの潮吹きみたいだったな、と

呑気に思った。

「ここは？」

俺は海に仰向けで浮かんでいた。さきほどまでと同じ海とは思えないほど落ち着いた海だった。景色から間違いなくサンディエゴの海だと分かる。十年近く通った海を間違えるはずは無い。

「あ、やっと起きたか」

「え？」

拡声器を通したようにくぐもった声に話しかけられる。加工されたように聞こえるが、間違えるはずは無い、馴染みある声だ。

「春樹か!？」

海面を漂う俺の横で優雅に泳いでいるのは、クジラだった。そのクジラから春樹の声がする。

「おう、毎年会っていたけど、話すのは久しぶりだな」

「本当に、春樹だったのか……」

「何だ、その反応。大変だったんだぜ、お前のためにサンディエゴの海に残るの。他のクジラの仲間に置いて行かれるし、寒いし」

彼は饒舌に、楽しそうに話を続ける。その口調は、間違いなく春樹のものだった。

「春樹……!」鼻の奥がつんと痛み、塩辛さを感じる。……どうやら、海水を呑んでしまったようだ。

「お前、駄目だろうが、あんな雨の日に海に近づいちや。昔、嫌というほど学んだだろ？」

「誰かが——いや、あれはお前じゃないのか？名前を呼ばれたんだ、海から」

「ああ、それ、妖怪的なやつ」あっけらかんと春樹が答える。「サンディエゴの海にはいるんだよ。俺がお前を海に引き込むような真似するわけねえだろ」

それから、俺と春樹は久しぶりに他愛も無い会話を続けた。二人が好きだった映画の続編が昨年公開されたことを伝えると、春樹は観たかったなと悔しがった。

そして、最も伝えたかった事を口にする。

「俺、結婚するんだ」

「おお、おめでと」

「相手は夏香ちゃんだよ」

「えっ？」春樹が目丸くする（多分。クジラの表情はさすがに分らない）。「お前！」

「ん？」

「お前、亡くなった親友の妹に手エ出す男だったのかよ！」

「色々あったんだよ！」

初めて会った時は、子どもに見えた夏香も、今ではすっかり大人の女性になっていた。俺なんか、亡くなった兄の代わりにはならないとは分かっていた。それでも、俺と夏香は同じ苦しさを、共に乗り越えて来たと、少なくとも俺は感じていた。

サンディエゴに来る前、夏香に言われた。

「サンディエゴに行くのはこれが最後にしてほしい」

毅然とした態度で、俺の目をただ真っ直ぐに見つめる。この吸い寄せられるような彼女の瞳に、

俺はいつも惹かれていた。

「このままサンディエゴに行き続けるなら、あなたはずっと縛られたままだよ。それは、兄も望んでいない」

「……………うん」

夏香は、俺が毎年サンディエゴに行くのを、いまだに春樹を探し続けているとからだ思っていた。

「お願い」あの日、春樹の生家で初めて会った時の、涙も流せず茫然としていた彼女の面影はそこには無かった。「これからは、わたしと前を向いていて」

俺はその時、力強く頷いた。

それから、またしばらく二人で色々な話をした。やがて——

「じゃあ、俺、もう行くわ」春樹が言う。

「ああ、元気で」

「お前もな。会社辛いなら、転職しちまえ。大抵のことは、意外とどうにでもなるんだよ。クジラとして何年も生き抜いてきた俺が言うんだから間違いないぞ」

「ああ、考えておく」俺は苦笑いした。そして、ふと尋ねる。「なあ、辛くはないか？」

「あん？」

「海での暮らしは。地上に戻りたいとか……。いや、何というのかな」

「辛くなんかねえよ」急に春樹が横に一回転する。大きさに見合わず俊敏な動きだった。波に流され

そうになった。「毎日が海水浴みたいなもんだぜ、最高の暮らしだよ。お前も一回なってみるか？ クジラに。観光客の前で、どうやってパフォーマンスしようかと考えると楽しいぜ」

「いや、俺は今遠慮しておくよ」クジラの表面に付いたフジツボに触れる。不意に、今自分がクジラと話しているという現実が信じられなくなる。「じゃあ、またな」

「おお、じゃあな」春樹は、大学で別れた時のような能天気な声を出す。「あのさ」

「え？」

「夏香のこと、頼むな。幸せにして——いや、なつてくれよ、二人で。あとさ、悪いんだけど、うちのお袋のことも、頼む」

「当たり前だよ、任せとけよ、俺に」

「……悪いな」

最後、クジラ——春樹は微笑んだようだった。クジラの表情なんて分からないが、親友の気持ちぐらひは、分かるつもりだ。

多分、もう、彼と会うことは無いのだろうという確信があった。

また、意識が遠のいていく。

気が付くと、漁港近くの岩場に倒れていた。

※

『おい、大丈夫か!? しっかりしろ!』

顔をべしべしと叩かれていることを感じ、ゆっくり目を開く。

「あ——」

目の前に、漁師の顔があった。これまで見たことが無いほど、焦った顔をしていた。

『は——春樹は?』

『バカか、お前は』漁師が目を充血させて、口から唾を飛ばして怒鳴った。『どうして、海に行った? 死にたいのか? 自殺がしてえなら、俺の前でやるんじゃない?』

周りを見ると、幾人かの若い漁師や警察がいた。どうやら、俺のことを探していたようだ。

『ごめん、悪かった。反省しているよ』俺は目の前の年老いた漁師に謝った。

漁師は、ぶつくさ何かをぼやきながら、俺を担ぎ上げる。さすがに早口すぎて、何と言っているかは聞き取れなかった。

『あの、春樹——いや、近くにクジラはいなかったかい?』

『なに?』漁師は、呆れた顔で見つめてくる。まだ懲りないのかこいつは——そんな目をしていた。『いや、お前は今朝、ここに一人で倒れてたのを発見されたんだ』

では、春樹は既に去った後だったのだろう。

いや、そもそもあれは現実の光景だったのだろうか。クジラとなった春樹と会話をした記憶は確かに俺の中に残っている。しかし、それが俺の幻覚では無かったと断じることが出来ない。

そもそも、クジラと会話をしたなんて、自分でも信じられない。最後に春樹と話したことを疑いたくはないのだが。

おい——考え込んだ俺に、漁師が言う。

『日本から、謝罪の手紙を送れ』漁師が俺の肩を支え、持ち上げる。俺が想像していたより、彼の身体は細かった。

『へ?』

『俺が死ぬまで、毎年だ』俺に肩を貸して、歩き出しながら、彼は俺に目を合わせようとしない。どうも、少し照れているようだ。安堵感が俺に伝わるのが恥ずかしいらしい。『分かったな、このバカ野郎』

『ああ、分かったよ』俺は、思わず微笑んでしまう。

担架に担がれながら、ちらりと海を見る。

『あ——』

遠くで、小さく水が噴き上がっていた。

クジラの潮吹きだ。それを見ながら、俺は日本にいる夏香と、自分の未来についてを想った。

クジラの潮吹きは、彼らという生き物が、生きている証そのものであり、——春樹という親友から、俺へのエールでもあるのだ。

了

コメント

主人公の親友、春樹は、共に行ったアメリカカリフォルニア州サンディエゴへの旅行の際に、海に落ちて帰らぬ人となってしまふ。それからしばらくして、再びサンディエゴに訪れた主人公の前に現われたのは、一頭の鯨。主人公は、このクジラこそが春樹であると直感する。それから、毎年、主人公はクジラ、もとい春樹に会うため、サンディエゴを訪れるようになる。主人公と春樹の友情を描いた作品。